

## (4) サステイナブル・ツーリズム

### 概要

観光事業による環境・社会負荷を軽減し、観光サービスの付加価値を高めることで、持続可能な観光を確立し、総合産業である観光を通じ、環境・社会・経済の調和と統合を図る。

固有の自然資源と人文資源を有する離島は、観光地として魅力的であり、特に、対馬は、大陸系・日本系・共通系・対馬固有の資源が混在・集積するユニークな国境離島です。観光対象としての比較優位性が高く、ポテンシャルが高い観光地ですが、高度経済成長期から旧6町合併前後まで、主に水産業、林業、建設業が島の社会経済を支えてきました。そうした基幹産業が低迷する中、観光業は、雇用、所得、投資誘発、租税、インフラ整備効果等裾野の広い総合産業であることから、対馬の社会経済を支える主要な産業になりつつあります。

大衆観光(マス・ツーリズム)は地域に一定の経済効果をもたらす一方で、様々な負の影響を及ぼします。その反省から、環境と経済の両立のために生まれた新たな観光が「サステイナブル・ツーリズム」(持続可能な観光)です。近年、インバウンドによる「オーバーツーリズム」とSDGsへの関心の高まりを背景に、環境・社会・経済の調和に資するサステイナブル・ツーリズムへの注目が集まっています。



図 27 サステイナブル・ツーリズムによる環境・社会・経済の調和と統合

観光産業の存立基盤となっているのは、対馬特有の自然風景、動植物、歴史、民俗文化、食、集落のまちなみや雰囲気、人情、アクティビティ・体験、文学・アニメ等の資源です。つまり、観光を持続可能なものにするには、まず、環境・社会への負荷を軽減させる必要があります。

取るべき手法としては、観光による移動・飲食・宿泊に伴う負荷の軽減(エネルギー、CO2、取水、排水、廃棄物)やリスク緩和(外来生物や病害虫、感染症の持ち込み等)、観光行動に伴う負荷の軽減(釣りすぎない、釣り場を汚さない、登山道以外を歩いて踏み固めない等の観光資源利用のマナー、ツシマヤマネコの餌付け撮影やレンタカー等自動車運転によるロードキル、希少野生動植物種の違法な捕獲・採取、大声で騒いだり、撮影のために無断で私有地に入る等の地域での振る舞い等)を図るためのガイドラインづくりや旅行会社や旅行者への協力呼びかけが考えられます。観光地側へは、持続可能な観光地経営として、観光事業者による資源利用のガイドライン・ルールづくりと事業者等への理解促進が求められます。

サステナブル・ツーリズムでは、環境・社会・経済の問題を現地で見学し、解決に向けた体験活動等を行う「スタディツアー」に対するニーズが SDGs とともに高まっています。魅力あるツアーコンテンツや体験プログラムづくりに加え、生物多様性や海洋プラスチックごみ問題について現場で分かりやすく解説し、今後一人一人に求められる行動のきっかけやヒントを与えられるような「インタープリター」(人と自然・歴史文化・諸問題とを結びつける人)の育成と確保が必要不可欠となります。また、ツアーにおいて、島の生活文化や人情味に触れられる農林漁業体験民宿(以下、民泊)は魅力や満足度を高める重要な要素です。民泊を基点として、農林水産物の高付加価値化と顧客確保につながるため、民泊の普及にも取り組みます。

観光事業による環境・社会負荷の軽減や観光地の美化清掃等には、新たな財源を必要とします。伊平屋島や座間味島、佐渡島等他の入島税(法定外目的税)の取り組み等を参考にしながら、財源確保策を検討します。



写真6 対馬への SDGs スタディツアー(関西経済同友会 環境・エネルギー委員会)